

庄内協同ファームだより

No.113 2006年9月号



発行/
〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338
tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140
http://www.shonaifarm.com



毎年行っている刈取り前の圃場巡回

7月に雨降りの続いた日に読んだ本に、地球温暖化により、今後起きる気象の異変についての現象が記されていた。それを証明するが如く、7月には、全国至る所で大雨により河川が氾濫し、土砂崩れが起き、多くの命が犠牲になっている。

私達の住む庄内地方でも、冬の庄内町での強風による列車転覆事故、7月13日の大雨による土砂崩れのため線路と国道が埋まり、8月9日によろやく運転が再開するなど、このところの気象変化は今までになかったくらい大きく激しいと感じるのは、私だけだろうか！

また、本の記述の中に早く現在の温暖化を止めないと

加速度的に温暖化が進み、食糧危機と水不足で人間の住めない世界になるとの予測が出ていた。これが現実にならないように祈るだけである。

今年は6月までは比較的順調に生育は経過したが、7月に入ると曇天と雨の日が続く、太陽は数日ほどしか顔をみせず、日照時間は平年に比較にならないほど少なく、稲の生育は軟弱徒長の最悪の姿で、葉色の濃いところには稲熱病も見られる。山間地では青虫が異常発生し、農薬の散布を余儀なくされている。作業の方も、いつもなら7月上旬に終了している作溝作業が8月まで繋がってしまった。それでもまだ田面が硬くならない圃場がある。稲の根は未だ張り具合が悪く、病気などに罹りやすくなっていると思われる。

それに、8月に入り急に暑くなり、出穂以降の稲は、非常に難しい管理になると思うと、これからどうなるのかと心配の日々である。細心の注意を傾けて、秋の収穫には喜んで1年の作業が終える事が出来る様に頑張りたい。

例年のように8月1日には、村から2人が代参として上の山(月山)に登る。今年の豊作と渇水にならないように、そしてその他諸々のお祈りをして来る。昔から続いている習慣である。宗教とか信仰とかの世界とも違う、昔から人々の自然に対する畏敬の念から行っている事なのではないかと思っている。以前は、下の山(鳥海山)にも登っていたが、年々講に参加する人が少なくなり、今は止めてしまった。時代の変化と共に、このような習慣も廃れていくのではないかと思うが、せめて自然に対する畏敬の念は持ち続けたいと思うこの頃である。

野口吉男

協同ファームの「お米」



様々な生き物たちの住み処になった
田んぼにも稲穂が出揃いました。

刈り取りまであと少しです。
驚く程に増えてきたタニシ。可憐な花を咲かせるコナギヤオモタカ。飛びはねる無数のイナゴ。いろんなものが共生している賑やかな田んぼに、コンバインの轟音が響くのもうすぐです。

一年をかけて必死に取り組んできた有機での栽培も、農薬を減らした栽培も、8月に入ってから好天気に助けられ、見事な稔りを見せています。コシヒカリ、ひとめぼれ、はえぬき、ササニシキのうるち四品種ともち米に加え、黒米(有機栽培)も3009パックで販売致します。

又、年間を通して私達の米の定期購入を希望する方には、特典のついた「米会員」も



Let's クッキング

『黒米ごはん』を炊いてみよう!!

材料 4人分

米.....3合
黒米...おおさじ3
塩.....少々

作り方

米をとぐ。
に黒米を加える。
を2~3時間水に浸しておく。
黒米から色が出るので浸した水をそのまま使って、塩少々を入れて炊き上げる。紫色のごはんに、黒米の粒々がプチプチした食感を残していて、とてもおいしい!!

おすすめですよ。
「いつの時期に食べても変わらぬおいしさ」を心がけてはおりますが、とれたての新米の味は格別です。炊き上がった釜から立ちのぼる何とも言えない香ばしい匂いは、私達の「丹精」の香りです。米どころ庄内から安心、安全を添えて、私達が自信をもっておすすめします。どうぞご期待下さい。

第18回 庄内協同ファーム 定期総会 開催される



2006年7月31日、庄内協同ファーム事務所を会場に、庄内協同ファームの定期総会が開催された。法人を設立して18年を経過し19年目に当たる今期の総

会の主なテーマは、まもなく10年目を迎える第1次の10ヶ年計画に変わる新しい長期計画をどのようなものにするか、これをどう実現するかであり、もうひとつは今後3年間を担う役員を選出である。

第1次の10ヶ年計画は数字の上では、ほぼ計画通り推移しているが、庄内協同ファームの活動を始めたメンバーはほぼ50歳代に達した今、第2次の10ヶ年計画を各組員、庄内協同ファーム組織双方にとって後継者づくりを進めながら事業の発展と世代交代を同時に進めていかなければな

らないという課題に対し十分に答えるものでなければならぬこと。また、今後も有機栽培を推進しながら地域の環境にやさしく、安全でおいしい食べ物が生産できるよう、技術の向上に努力することなどの重点事項を中心とする事業計画が今年度予算と共に決議された。

役員選挙規定により、選出された理事、監事の顔ぶれと、その後の臨時理事会での協議の結果、19期の役員体制は次のように決定された。

庄内協同ファーム19期役員体制

代表理事	志藤 正一	代表代理	菅原 孝明
理事	斉藤 健一	理事	富樫 英治
理事	五十嵐 良一	理事	小野寺 仁志
理事	小野寺 喜作		
監事	工藤 広幸	監事	今野 裕之

組合員 訪問

その5

中村 公明 さん

今や貴重となった特別栽培のササニシキを生産しているのが、庄内町小出新田の中村公明さん(五四)。妻の典子さん(五

特別栽培にしてから ササニシキがおいしくなった。

三)が「ササニシキを食べたい」というため、周囲の農家がササニシキの生産をやめる中で「こだわって守り続けてきた。

ササニシキへのこだわり

ササニシキは作りづらいいといわれるが、収量を上げようと欲張らなければ決して難しいとは思わない。

最低ラインの十^{kg}七・五^{kg}八俵を目標にしている。もうと^{kg}づばい収穫できる人もいるが、自分はまだ稲との会話が不足しているのかもしれない。

また、刈り取ったササニシキを杭がけ

して自然乾燥し、脱穀したワラを牛のエサにしている。ササニシキは茎が柔らかいので、杭がけしやすく、牛のエサにびったりなところも気に入っている。

特別栽培に取り組んだきっかけは

今後の販売のことを考えたときに、慣行栽培ではなく、こだわった米作りをし、特定の販売先を確保することが必要と感じた。

最初は除草剤一回と化学肥料三〇%減で取り組んでいたが、庄内協同ファ

ームに参加して化学肥料をやめた。

そうすると化学肥料の窒素効果がなくなつたため、稲が貧弱で見た目も面白

くなかつた。そこで、翌年からあわてて飼っている牛の糞尿で作った堆肥を入れ、肥えた土^{kg}づくりに取り組んだ。毎年、十^{kg}当り約一^{kg}の堆肥を入れている。

もともとこの辺りの田は砂地で、土がやせているのだが、堆肥を入れだしてから土が肥えてきたと思う。

特別栽培は手が掛かる

除草と虫対策が大変。一人で続けているのはなかなか忙しい。それでも、特別栽培にしたら、毎日食べているササニシキがおいしくなった。

それならさらにと、自宅で食べる分は無農薬栽培に挑戦。除草が追いつかず

に雑草だらけになってしまった。雑草のたくましさには参る。



しかし翌年、その田の周辺の草刈りをした時、刈った草からホタルがわーっと飛び出てきた。あの光景には感動して、今でも目に焼きついて

いる。やっぱり無農薬は違うのだと実感した。

牛も飼っているが、以前、この辺りの農家は必ず牛か豚を肥育して、

稲作との複合経営をしていた。今はほとんどの農家がやめているが、動物が好きで続けている。

牛のエサ用に飼料用トウモロコシを栽培したり、最上川河川敷の牧草地の草刈りをしたり、仕事は本当に忙しい。集落の会合などで牛の時間が遅くなるので、牛がモウモウと鳴いて催促する。好きで

なければできないとつくづく思う。

それでも牛の堆肥で土作りをして、特別栽培ができる。家の中で小さな循環型農業を実践できるのだから幸せではないかな。

今後の課題は

雑草や虫対策としてカモを水田に放すカモ農法に取り組みたい。カモ農法ではカモを狙うカラス対策が重要とか。カラスをどうするか頭を悩ませているところ。一方で、カモが蛍の幼虫まで食べてしまつのではないかと心配している。いろいろ勉強しなければ。

プロフィール

中村公明さん(五四)
庄内町小出新田
家族 妻、長男夫婦、孫二人、両親の八人暮らし

経営規模 稲作五・四畝(うち三・六畝自作地)、繁殖牛八頭

趣味 古本収集。昔の本を集めて読むのがとても楽しい。集落の俳句会に入り、句作に励む。自分の日の生活に沿った生活句を得意とする。



へんりれー 徒然草

志藤 知子

「選ばれた枝豆たち」

左から右へと枝豆を少しずつ動かしながら選別をする。着色、変形、未熟、虫喰いをすばやく拾い、残りを右へ流す。右側のコンテナへ販売できる枝豆、左側のコンテナには廃棄する枝豆を落とす。作業台に小高く積まれた枝豆を少しずつくずしながら、脱莢機の音の鳴り響く稲倉の中で仕事は進んで行く。

豆の出来の良し悪しによつて、正品率はずい分と違う。今日収穫してきた豆は黒ずみ、虫喰いが多く、選別にはずい分手間がかかった。200gで190袋、300gで122袋。ここ数日の出荷量から見れば、そんなに多い量ではなかったにもかかわらず、廃棄量は37kg。製品の重量は両方で74.6kgだから、なんと3莢に1莢は捨てている勘定になる。長雨が続きたり虫の発生が多かったりして、豆の状態が良くない程、左側へ多く入り、もったいない



といふ気持ちがあつても働いてしまつた。時々「こんなのはどうする？」といふ声が上がると、「目にとまつたものは遠慮しないで左側へ」と答へつつも、味に影響のない程度の虫穴なら何でもないので、と心の中では思つてしまつた。

ひと袋の中に入つている枝豆は「選ばれた枝豆」であること、を食べている人は知らない……と思つた。およそ75kgの枝豆を袋詰する為に37kgの枝豆を廃棄している事を知つてもらいたいと思つた。袋詰された結果を見れば、化学肥料や農薬を数回使用したものと遜色なく出来る、という錯覚を与えてしまつたかもしれないが、それは選別によつて生み出された結果であつて、有機栽培の枝豆全体の結果では決してない。病害虫の被害は目に見えない所で生産者が選別という形で負つている。

袋に入つて売られている枝豆がすべてではないことを食べる人にちよつと意識してもらつと、作り手も少し救われるような気がする。農産物は工場規格通りに出来るものと違い、ほとんどすべ

てのものに格外品が出る。

今が旬のトマトもキュウリもナスも、これから秋にむけて豊富に出回る果物類も、選別によつて何割かは落とされる。

「これが全部売れるものであればねえ。」

うず高く積み立ていく廃棄の量を計測し終えて、そつとぶやく。これが農産物の宿命。今日の37kgのうち、5kgずつを3人の友人達へ。あとは明日の作業終了後、枝や葉と一緒に柿畑の緑肥となる。

農業ニ知識

新形質米

稲の品種改良は美味しく、栽培しやすく、しかも収穫量の多いものを目指に行われてきましたが、近年はそれに加え米の可能性を最大限に活かした品種改良、在来種の発掘にも力を入れています。そこで生まれてきた米を新形質米といい、「低アミロース米」「高アミロース米」「低グルテリン米」「低アレルゲン米」「有色素米」「巨大胚芽米」「大粒米」「香り米」などがあり、多くの品種が登場し普及しています。

「新形質米」がもっと普及する事で、お米の重要性が再認識され、消費減退に歯止めがかかり、なお且つみなさんの食生活がより豊かになることを願ひ期待します。



あとがき

ただちや豆の収穫に追われるうちに暑かつた夏も峠を越し、朝夕には涼しさを感じる程に、季節は速い移り変わりをさせる。米どころ庄内の一面の緑が黄金色に変わる季節でもある。

庄内の農家が米作り一本で暮らせた時代に比べると、年に一度の出来秋を待つ心も幾分、平坦になつたかもしれない。広い田んぼで作業をする人影がめつさり少なくなつたと思ふ淋しさのせいも、米づくりに対する熱意さえも薄れてきたかのように感じてしまつたのは、私だけだろうか。

米だけでは暮らせないこのご時世で、それでも田んぼにこだわり、作る人の気持ちも、食べる人の関心も、再びたんばへ呼び戻そうと有機栽培に懸けている。

一つ一つの地道な作業は、食べる人の為のみならず、田んぼの生き物たちへの慈しみ、自分の選んだ道に対する強い執着。情熱という言葉を使うには、ちよつと気恥ずかしい年代になつてしまつたけれど、一年の頑張りの成果を楽しみに待つだけの努力は注いだと胸を張つて言える百姓であり続けたい。

(東)

